

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 栗田博之



学位申請者 山本昭代

学位申請論文 「ジェンダーと社会変化の人類学—メキシコ・ワステカ農村の事例から—」

論文の概要

山本昭代氏の博士学位請求論文「ジェンダーと社会変化の人類学—メキシコ・ワステカ農村の事例から」は、メキシコ・ワステカ地方の一農村、サンタクルスにおける長期間のフィールドワークに基づき、「土地」、「生業」、「移住」、「子供」、「結婚」、「家」、「シングルマザー」等の問題に焦点を当て、それをジェンダーの観点から記述・分析した民族誌である。フィールドワークは1996-1997年、2001-2002年の2回に分けて実施され、その期間は計15ヶ月に及ぶ。また、現地における参与観察、聞き取り調査のみでなく、国勢調査、社会保険省等の行政機関から発表されたデータを積極的に参照し、分析の中で活用している。農村での人々の生活の実状を詳細に分析しながら、オーソドックスな論文構成で議論が進められているが、ジェンダーを女性／男性という単なる性差のカテゴリーとして理解するのではなく、例えば、「娘」・「妻」・「母親」としての女性、「息子」・「夫」・「父親」としての男性等、親族関係の中で個人が占める位置付けを重視し、ジェンダーを関係性の中で扱う必要性が強調されており、文化人類学におけるジェンダー研究の方法論的刷新が目指されている。このような視点はフィールドワークを進める中で徐々に獲得されていったものであり、そのような視点を積極的に導入する事によって、単なる記述としての民族誌を越えた地点に至る事が本論文の最終的な目標となっている。

論文の内容

第1章では、導入部として、従来のラテンアメリカ社会に関するジェンダー研究に関する理論的検討が行われている。メキシコを初めとするラテンアメリカ社会では、一般に女性と男性の性差が明示的であり、また性分業も強調される事が多い。従来のジェンダー研究では、経済開発や移民等、ラテンアメリカ社会の急速な変化の過程で、女性の賃金労働への参加を初めとする、女性を取り巻く経済状況の変化との関連でジェンダーのあり方を検討するという形を取ったものが多い。本論文の主要なテーマとなるのも、まさにこの「ジェンダーと社会変化」の問題である。しかし、従来の研究では、女性／男性という安

易な二分法が前提とされ、例えば、「娘」・「妻」・「母親」等、親族としての位置付けは「女性である事」を説明するものとして扱われて来た。そのため、ジェンダーの本質主義を否定しながらも、それを十分に乗り越える事が出来ず、また人と人の差異の構造とそのダイナミクスを明確に解き明かす事に失敗している。これはジェンダーが分析モデルとして確立されて来た過程での方法論に問題があったと言えるであろう。この点を克服するために、本論文では、性差を含む差異の構造として、特に親子を中心とする親族としての関係性に焦点を当て、その関係性における個々の女性や男性の位置付けやその意味が社会変化とどのような関連を持ち、またそれ自体がどのように変化しているかという点に関する考察が試みられている。具体的には、親族としての関係のあり方とその意味が生成される重要な場面として、「子ども」、「結婚」、「家」が主に取り上げられる。

第2章では、調査地となったワステカ地方にある先住民村落サンタクルスの歴史とメキシコ農村を取り巻く国内の状況、そして村落における人々の暮らしが概観されている。サンタクルスは、村内に教育機関として幼稚園から高等学校までが設置されており、交通手段や通信網もかなり普及している一方で、村民のほとんどは先住民言語であるナワ（ナウアトル）語を日常語とし、一定範囲での自治を行う等、先住民村落としての伝統や慣習を維持している。1990年代の初め、メキシコ政府は新自由主義経済政策への方針転換を行った。その結果、天水に頼る小規模な農地しか持たない農民は、政府から自助努力の必要な貧民として位置付けられ、社会福祉政策の主な対象となった。農村に暮らす人々の多くは農業だけで生計を立てる事は困難となっており、農業以外に活路を求める必要性が高まった。実際、サンタクルスの大部分の男性達は今日も何らかの形で農業に従事している一方で、そのほとんどが移民労働や商業など、他の仕事と組み合わせて生活の糧を得ている。このような背景の下に、以下の章で、サンタクルスにおける農民生活のあり方の様々な相が具体的に記述・分析されて行く。

第3章では、サンタクルスにおける生業、土地、村人としての権利や義務の三者がどのような形で歴史的に結び付いているのか、それが近年どのように変化して来たか、またそれはジェンダーとどのように関連しているかが述べられている。サンタクルスにおけるジェンダーのあり方は、1940年に創設されたエヒードの土地に対する権利と切り離して考える事は出来ない。村内に住み、村内で働き、村内で一生を過ごす、村落の成員としての権利はエヒードの土地への権利と結び付いており、その権利を持つ者は原則として成人男性/既婚男性に限定されていた。そして、後に成員権は父親が村内の生まれであるという「出自」と結び付けられるようになった。これは、女性の立場から見れば、村への帰属は父親や夫といった男性を通じたものでしかない事を意味している。経済状況の変化の中で、土地が持つ経済的な価値が次第に低下して来たにも関わらず、男性の村落共同体への帰属意識は、相変わらず、村内で働き、暮らして行く権利と結び付けられた形で持続している。しかし、女性にとっては、村落共同体とのつながりの意識は薄れ、国家との直接的なつながりが強調されるようになって来たと言われている。

第4章では、今日のサンタクルスの人々の生活を語る上で欠く事の出来ないものとなっている、国内都市への移住が取り上げられている。サンタクルスからの国内都市への移住は1980年代以降急増し、今日、若い世代の女性/男性の大部分が移住経験を持っている。また、近年では、子供のいる既婚女性の都市への移住が目立つようになって来た。移

住先の都市での仕事と暮らしは、女性／男性で大きく異なり、女性の約9割が住み込みの家事労働者であるのに対して、男性は約7割が建設労働者として働いている。余暇の過ごし方や給料の使い道もとくに独身者の間では男女差が大きい。しかし、サンタクルス周辺の村落出身者達は、毎週日曜に特定の公園に集まるなどして、都市における同郷者間のネットワークが形成・保持されている。都市への労働移住が一般化した事は、世代と性別による社会的・経済的な条件が大きく転換した事を意味する。それまで村内では現金収入を得る機会がほとんどなかった若者や女性が、時には村内で働く父親や夫の収入を上回る現金を手にする事が可能となった。また、それにともなって、若い世代の女性／男性が親族や近隣との関係性の世界から離れ出る事も可能となった。様々な移住の事例を検討する事によって、移住の動機はジェンダーと大きく関連し、また定住か帰郷かを選択する場面においても、ジェンダーは大きな要因として働いている事が明らかにされている。

第5章では、ワステカ農村の社会変化の上で、都市への移住と並んで大きな意味を持つ学校教育の普及と産児制限が取り上げられている。農村における「子供」は、近代化の過程で大きくその意味を変えた。かつて、子供はすぐに働き手として家族に役立つようになる存在であったが、近年では修学期間が長期化し、子供は手間と費用のかかる存在となった。学校教育に対する考え方は、男子であるか女子であるかによって依然として大きな差があるが、子供の居場所は学校以外になくなってしまい、学歴を人としての価値と結び付けて考えるような意識が生まれて来ている。このように子供の位置付けが変化した事は、同時に人々の生殖に関する意識をも変えて来ている。少子化を目指す事は、親にとっての課題であるだけでなく、近代化を急ぐ国家にとっての重要課題でもある。しかし、親にとっても、国家にとっても、受胎調整は基本的に母親である女性が責任を持つべきものとされている。そのため、受胎調整のための医学的な処置の対象となるのは女性のみであり、公立医療機関を通じて行われる避妊処置は強制的ですらある。子供の修学期間の長期化と産児制限は、女性に対して現金支給を行う貧困対策事業によって、近年更に促進されている。

第6章では、婚姻の問題に焦点を当て、サンタクルスにおいて、その意味と実践がどのように変化して来たのかが明らかにされている。サンタクルスでは、過去30年の間に婚姻のあり方は大きく変化した。かつては女性の父親が娘の結婚に関する最終的な決定権を持っていたが、近年父親は娘の結婚に余り関与しなくなった。いつ誰とどのような形で結婚をするかは、結婚する当事者同士、特に女性が判断を下すべきだとされるようになったのである。確かに、人々の間では、婚姻関係は永続するべきものとされ、また結婚後の夫方居住が規範となっている事に変わりはない。しかし、近年理想的な婚姻のあり方と現実の婚姻関係とのズレが次第に大きくなって来ており、それにともなって、規範的とされる婚姻のあり方そのものも少しずつ意味を変えて来ている。この点は、結婚した女性にとって、姻戚関係（夫の親族）よりも親族関係（自分の親族）の方が重要な意味を持つ場面が増えて来ている事とも関係しているという分析結果が示されている。

第7章では、「家」をめぐる親族関係が取り上げられている。サンタクルスにおいて、家は系譜に沿って相続されるものであるという側面を持つと同時に、自ら建てるものでもある。そして、人々の間では、自分の建てた家に対する強い思い入れがしばしば語られる。近年、家の建て方が変化し、かつては手作りであった家の建設に多額の費用がかかるよう

になった。それにともない、家を建てる資金を提供したという事がその家は誰のものか、誰が住む事が出来るかという点と強く結び付くようになった。この点で興味深いのが、男性だけでなく女性も賃金労働について現金収入を得る可能性が開かれた事によって、女性が目に見える形で家の建設に関与するようになって来たという点である。妻が夫の家の建設資金を提供する事や未婚の娘が両親の家の建設資金を提供する事例が増加しており、家に住む権利のあり方が変化し、同時に親族としての位置付けも変化して来ている。特に、夫方居住の原則により結婚後家を出て行った娘が両親の家の建設資金を提供する事によって、結婚後も自分の親と共に暮らしたり、子供の世話を自分の親に任せて賃金労働に従事するという興味深い事例が報告されている。

第8章では、これまでメキシコでほとんど研究される事のなかった農村のシングルマザーの事例が取り上げられている。サンタクルスでは、かつて婚外子が生まれたり、子供が幼い時に親が離婚した場合、母親は子供を自分の父母などに託して、新しい相手と結婚して親の家を出て行くのが通例であった。しかし、都市への労働移住が一般化した1980年代以降、シングルマザーとなった女性が独身のまま、自分で子供を養い続ける事例が見られるようになった。サンタクルスでは、シングルマザーは村落内で周縁化されながらも、かつてのように全くありえない存在とみなされるのではなく、ある一つの現実的な選択として受け入れられるようになって来ている。この背景に、賃金労働に従事する機会が女性にも開かれ、女性が自分の稼ぎで子供を養う事が可能となったという経済的条件が大きく作用している事は明らかであろう。しかし、子供の意味、結婚の意味が大きく変化し、同時に娘と親との関係が変化して来ている点も見逃してはならない。そして、逸脱とみなされる関係のあり方も、現実の様々な条件下で実践のされ方に変化が起こり、伝統や規範の中心にあると考えられて来たものにズレが生じて、その意味を徐々に変えて行く事があると結論付けている。

最終章では、本論文の最終目的であるジェンダーの研究視角の検討に立ち戻って、ジェンダーの視角で親族を読む事が研究上どのような意義を持つかが論じられており、同時に、人類学におけるフェミニスト研究の意義についての再考がなされている。メキシコ先住民農村は、近年のグローバルな社会経済的状况の下で、土地や市場労働のあり方、都市との関係、学校教育を初めとする様々な国家的制度の導入等の点で大きな変化を経験している。しかし、これらの変化を人々がいかに経験しているかを捉えるためには、女性/男性という単純なる二分法的なカテゴリーを前提にしてはならない。メキシコの農村の女性を対象とした従来の研究では、急速な社会変化にともなって伝統的とされる性分業が変化し、家族との関係や女性としてのライフコースが多様化して来ている事が報告されている。しかし、一見「多様化」と見えるものが果たしてどのような意味での「多様化」であるか、慎重に検討する必要がある。そこで起こっている事は、「女性の自立」や「女性への抑圧の解消」といった定型化された言葉で表せるような単純な事態ではない。ジェンダーを女性/男性、支配/被支配などの二分法を前提として分析する視点からではなく、社会を複雑に交差する差異の構造と捉え、その構造に焦点を当てて分析する事によってこそ、社会変化とジェンダーの複雑な関係とそのダイナミズムを明らかにする事が出来るという事が本論文の最終的な主張であり、また結論でもある。

論文の評価

本論文が従来のラテンアメリカ社会に関するジェンダー研究が抱える問題点への反省の下に書かれている事は明らかである。ラテンアメリカの「農民社会」に関する文化人類学的研究はレッドフィールドやオスカー・ルイスを初めとして長い伝統を持つが、近年はしばしば「貧困」という、安易に近代化を前提とした概念に問題関心が集中し、国家政策との関連で社会経済的な側面を取り上げる傾向が強かった。そのため、ジェンダー研究においても、「女性の自立」や「女性への抑圧の解消」といった題目ばかりが突出し、一面的な記述・分析が横行して来たのである。

山本昭代氏はこのような従来の研究が抱える問題点を十分に意識しながら、サンタクルスにおいてフィールドワークを開始した。そして、参与観察、聞き取り調査を通じてデータを収集する過程で、女性のライフコースの多様性を単なる多様性として捉えるだけでは十分ではなく、その多様性の背後にある関係性に注目しなければならないという認識に至った。その結果、関係性の中でジェンダーを捉えるために、親族研究という文化人類学の伝統的な分野に踏み出して行ったのである。このような視点から収集された豊富なデータに基づく本論文は、ジェンダー研究と親族研究の接合を目標としており、女性に焦点を当てたメキシコ農村社会の詳細な民族誌として十分に成功していると言えよう。

しかし、ジェンダー研究と親族研究の接合という本論文の最終目標が山本昭代氏の意図した通りに達成されているかどうかに関しては、多少の保留が必要である。大変に意欲的な取り組みではあるものの、ジェンダー研究としても、親族研究としても、中途半端に終わってしまい、接合が十分に達成されていないような部分が多少見られるのである。既に述べたように、フィールドワークを進める中で、関係性という視点の重要性を発見したという経緯から、従来の文化人類学における親族研究の成果が十分に生かし切れているとは言えず、調査を進める手続きにも多少曖昧な点が見られる。この発見がより早い段階でなされていれば、ジェンダー研究と親族研究の接合が完璧に達成されていたであろう。

以上のような欠点を抱えているものの、長期間のフィールドワークにおける参与観察、聞き取り調査のデータを十分に生かして、豊富な事例を取り上げながら、メキシコの先住民村落に生きる人々の実像を様々な角度から分析しているという点で、本論文は高く評価すべきものである。

公開審査の概要

公開審査は、2005年9月22日（木）14時から国際コミュニケーション演習室で行われた。冒頭で山本昭代氏による論文の概要説明がなされた後、審査委員との間での質疑応答（一部は書面による）に入った。以下がその概要である。

まず、本論文の学術的貢献に関しては、審査委員から次のような高い評価が寄せられた。

本論文の第1の貢献は、ジェンダーを記述する方法論の刷新を目指した点である。ジェンダーを女性／男性という性差のカテゴリーとして理解するのではなく、親族関係の中で個人が占める立場を明示しながら、それぞれの立場の者が他の者との間で築く関係性が丁寧に記述されており、サンタクルスの人々の間に多様な女性／男性のライフコースが存

在する事を示す事に成功している。第2の貢献は、現代メキシコ農村の農民生活の実情を詳細に記述した点である。調査地のサンタクルスは輸出農業への転換が困難な周辺の集落であり、メキシコの新自由主義開発モデルの中では次第に切り捨てられていく運命にある農村の一例であると言える。しかし、山本昭代氏は主に女性の操る親族のネットワークに着目する事によって、都市の経済的資源がサンタクルスに転移するプロセスと、農村に存在する社会的資源（親族間・友人間の扶助関係等）が活用される状況を明らかにし、困難な状況下で村人の発揮するエイジェンシーを記述する事に成功している。

以上のような評価はすべての審査委員に共通するものであったが、審査委員からは幾つかの問題点も指摘された。

第1に、ジェンダー記述に関しては、様々な女性／男性の生き方を提示する事は出来たが、著者が研究対象として意図していた「権力関係の構築や生成のプロセス」については、一般論はもとより、サンタクルスの事例についてさえ、まとまった見解が提示されたとは言いがたい。これは山本昭代氏が本論文をフェミニスト民族誌と位置付けながらも、フェミニズムの批判精神を、もっぱら民族誌記述における書き手の政治性への警鐘として理解する事を選び、男女間の支配従属関係の解明手段、およびそれらの解体戦略としてフェミニズムを受け入れる事に逡巡しているためではなかろうか。山本昭代氏が主張するように、ジェンダーを女性／男性という単純な性差対立ではなく、親族とリンクさせて論じようとするのであれば、様々な親族関係間での権力関係、言い換えれば特定親族間での支配／従属、平等／不平等などの問題に分析を進める必要があったであろう。

この点は複数の審査委員から指摘された点である。ジェンダーをめぐる「権力関係の構築や生成のプロセス」が十分に描かれていないために、ジェンダーという用語自体が余り生きていない。ジェンダーという用語に引きずられてしまったせいも、同性間の関係性、すなわち女性／女性、男性／男性の関係性への配慮が十分ではない。むしろ、ジェンダー研究の枠組みよりも、親族研究の枠組みで考えて、文化人類学におけるこれまでの親族研究の蓄積をより積極的に活用すべきである。それが不足しているためか、分析概念／民俗概念としての親族用語の使用法に曖昧な点がある。以上のように、ジェンダー研究と親族研究の接合という点に関しては多少厳しい評価が下された。

第2に、「かつて」／「近年」という曖昧な対比がしばしばなされているが、メキシコの長期的変化（近代化・工業化）と短期的変化（経済的な行き詰まり・新自由主義）との区別が必要である。そして、それぞれの変化を引き起こした要因とジェンダーとの関連を詳細に分析すべきである。この点が十分に論じられていないために、本論文が一見するとメキシコの新自由主義政策を肯定的に評価するものと受け取られてしまう危険性がある。

以上のような指摘に対し、すべての点について山本昭代氏から明晰な受け答えがなされたというわけではないが、自らの主張を積極的に展開しながら、これらの指摘を将来の研究の深化に向けて生かして行きたいという前向きの姿勢が感じられた事は高く評価すべきであろう。

この他に、審査委員からは、政治経済学的な問題により積極的に目を向けるべきであるという観点から、今後の課題として次のような具体的な要望が出された。

第1点は、メキシコ国家の新自由主義経済政策が農村に浸透して行くプロセスとその結果の分析。具体的には、1992年のエヒード改革法によるエヒード権認証プログラムが

受け入れられて行った経緯と、それによって生じつつある階級構造の変化に着目し、こうした階級変動がジェンダーに及ぼす影響をより明確に整理してもらいたい。

第2点は、都市移住の多面的な影響の分析。著者の指摘するようにサンタクルス村民の都市移住は、村で得られない経済的資源へのアクセスを意味するが、同時に、多くの村民は都市の労働市場の最下層に組み込まれるだけでなく、先住民族として社会的差別の対象となるはずである。こうした都市での経験は、都市で稼いだ金に劣らず、サンタクルスの人々のジェンダーにも影響を与えているのではないだろうか。言い換えれば、階級とジェンダー、エスニシティとジェンダーという切り口で、サンタクルスの変化を再考する事を是非試みてもらいたい。また、こうした考察を通じて、メキシコにおける開発のあり方や先住民族の将来に対する展望を述べてもらいたい。

これらの要望に対し、山本昭代氏からは、今後更に積極的に取り組みたいとの回答があった。ジェンダー研究と親族研究の接合を目指しながら、同時に、より広い視野に立ったメキシコ先住民村落研究の発展が期待される。

論文審査及び学力の確認の判定

本論文は長期間のフィールドワークを通して得られた詳細なデータに基づき、社会変化の過程にあるメキシコ先住民村落のジェンダー／親族に焦点を当てた質の高い民族誌であり、同時に、ジェンダー研究と親族研究の接合を目指して新たな方法論を模索しながら書かれた民族誌でもある。この接合には未完成の部分が見られるものの、多くの具体的な事例を交えながら、綿密な参与観察、聞き取り調査に基づいた着実な研究成果であり、将来的な発展も期待出来るとの観点から総合的に判断し、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するに値するものであると判断した。